
緋弾のARIA ～灰色の武偵 鎌鼬～

クロンボ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜灰色の武偵 鎌鼬

【Nコード】

N9179Y

【作者名】

クロンボ

【あらすじ】

武偵を色で表すなら『白』。武偵の敵なら『黒』。

しかし、そのどちらにも属す武偵がいた。彼は『灰色の武偵』。

原作沿いに進めて行く予定です。

オリキャラ設定

平川信（ひらかわ まこと）

東京武偵高校2年A組 専門科目は装備科

本名、平信^{たいら まこと}

平家の末裔だが、歴史上では滅亡したため名字を変えている。

元々、イ・ウーのメンバーであり、敵である源氏と行方不明である妹（今は大分検討がついてきている）を捜してくれるというのでイ・ウーに入ったが結局見つからなかったので組織を抜けた。

耳と反射神経がよく、後ろから狙われても弾が空気を切り裂く音で分かるため避けることができる。

逆に目が弱く（視力は良い）カメラのフラッシュをくらったただけで一分は何も見えなくなる

携帯武器は

日本刀『鎌鼬』

『鎌鼬』は一振りすると名前通り、鎌鼬を起こすことができる。

トカレフTT - 33

第0弾（前書き）

この話ではオリキャラは登場しません。

次話からです

第0弾

東京武偵高校第三男子寮

ピン、ポーン・・・

・・・ピン、ポーン・・・

（誰だ・・・？こんな朝っぱらから・・・いや、あのチャイムの鳴らし方）

キンジは眠い目をこすり、ドアを開ける。

「白雪・・・」

「キンちゃん！」

何しにきたのかは大抵想像できる。

どうやら白雪は弁当を届けに来たようだ。

「・・・でわざわざ弁当を届けに？大変だったろ」

「う・・・うつん。そんなことないよ。」

「昨日まで合宿行つてて春休みの間何もお世話できなかったから・・・」

「星伽白雪、俺の幼馴染みで代々続く星伽神社の巫女さんだ。しつかり者の大和撫子だ。」

「まあ・・・ありがとう」

「キ・・・キンちゃんもありがとうございますっ」

「何でお前がありがとうなんだよっ」

「だ・・・だってキンちゃんが食べてくれてお礼まで・・・」

「白雪は深くお辞儀する。」

「深くお辞儀したせいで黒の下着が見えてしまったのだ。」

「ダメだ。俺は禁止しているんだ。ああいうのを。」

「はい、防弾制服と拳銃。今日から一緒に2年生だね」

「始業式くらい銃は大丈夫だろ」

「ダメだよ、校則なんだから。それに・・・また“武偵殺し”みた

いなのが出るかもしれないし・・・」

「“武偵殺し”？でもあれは逮捕されたんだろ？」

「で・・・でも模倣犯とか出るかもしれないし今朝の占いでキンちゃん女難の相が出てたし・・・」

白雪の占いはよく当たる。

「分かった、分かったっ」

俺はちゃんと銃と携帯ナイフを装備した。

「キンちゃん・・・カッコいい。やっぱり先祖代々の『正義の味方』って感じだよ。」

「・・・やめてくれよ」

正義の味方なんかじゃなくていい。

「俺はメールチェックして出るから。先行つてろよ。」

「はいっ」

俺は普通に平凡な人生を送りたい。

だからまずは転校してやるんだ

このトチ狂った学校から

第1弾（前書き）

オリキャラが登場します。

第1弾

「げ、58分のバス間に合わねえじゃねえか」

生涯俺は今朝7時58分のバスに乗り遅れたことを悔やむだろう
なぜなら

『そのチャリには爆弾が仕掛けてやがります。チャリを降りやがったり減速させやがると爆発しやがります』

東京武偵高校2年探偵科遠山キンジ

今、俺は世にも珍しい『チャリジャック』に遭っている

並走するセグウェイには9ミリ短機関銃

サドルの下にはプラスチック爆弾

（・・・死ぬのか？こんな所で死ぬのか俺）

ふと前を見ると人影があった。

その人影は次第にはつきりしてきた。

日本刀を手をしている少年。

「信！危ないから俺から離れろ！」

「黙れ・・・」

信と呼ばれた少年は刀を抜くと大きく振った。

「『鎌鼬』発動！」

少年のかけ声とともにセグウェイはバラバラになった。

キンジはこのまま、助けしてくれるかと思ったが信が突然現れたセグウェイ10体ほどに囲まれてしまった。

「キンジ・・・後は頑張れ」

頼みの綱が切れてしまった。

どうする・・・

なんとなくだが、上を向いた。近くの建物の上には女の子がいた。そして、

「飛び降りた!？」

パラシュートを使って徐々に近づいてくる。

「バカ、来るな!!この自転車には爆弾が」

「武偵憲章1条!『仲間を信じ仲間を助けよ』　いくわよ!」

俺を助けるつもりか?でもどうやって

少女はパラシュートに足をかけ逆さまになった。

(マジかよ・・・!あの逆さまの体勢で受け止める気か?)

「ほら、バカっ、全力でこぐ!!」

「バカはそっちだ!こんな助け方あるかつつ!!」

(でももう他に方法もねえ。やるしかない!!!)

少女はキンジだけ受け止めると自転車から離れた。減速した自転車は爆発し、二人を遠くへ飛ばした。

生涯俺は今朝7時58分のバスに乗り遅れたことを悔やむだろう
なぜなら空から女の子が

神崎・H・アリアが降ってきてしまったんだから。

時間は少しさかのぼり、

セグウェイに囲まれた信は、

「あいつ、どんだけ用意してんだよ」

（囲まれた状態で攻撃したら蜂の巣にされるだけだ）

信はジャンプをして、セグウェイの中から抜け出した。

セグウェイは勿論撃ってきたが防弾制服の為問題はない。

そして、また刀を抜いた。

「『鎌鼬』発動！」

信は刀を振るとセグウェイが3体ほどバラバラになった。

「ちっ」

舌打ちをすると今度は拳銃を取り出しセグウェイ2体を撃ち抜いた。

拳銃をしまい、刀を両手で持ち直すと

「ラスト・・・『鎌鼬』発動！」

そして、5体を壊し、終わった。

信は刀をしまい、歩き出した。

歩きながら、携帯を出すと、ある人物に電話をかけた。

「おい。」

「せっかくのシナリオを台無しにする気？」

「別に大丈夫だったろ。お前がセグウェイ10体も送ってきたんだからよ。」

でも流石にやりすぎだったんじゃないか？キンジ死にそうだったじやねえか。」

「大丈夫、大丈夫。二人をくつつけるための序章だからまだまだ序の口だよ。」

「まだやる気なのかよ。」

「くふっくふっ。まだまだ続くよ。とまあ、平信^{へいしん}また後で。」

「その呼び方はやめろ・・・って消しやがったか」

このままじゃ始業式に間に合わねえな。まあいいか。

あの2人は無事なのか。

遠山キンジ・・・神崎・H・アリア・・・

第2弾

ここは・・・？

たしか爆発に巻き込まれて・・・

どうやら気絶していたらしい。

「・・・あれ、さっきの・・・女の子？」

（近ッ！！！！）

キンジと女の子の顔の位置はわずかにズレているだけだ。

（ダメだ。禁止なんだよこういうのは。）

「お・・・おい、起きろよ。」

俺はこの子に助けてもらった後の爆発で体育倉庫に突っ込み、跳び箱の一段目を吹っ飛ばして中にハマったらしい。

さっきから俺の目の前にあるプラスチック板だけなんだ？

（・・・名札？『神崎・H・アリア』でもなんでこんな位置に・・・

」

それは、制服が上がっているせいであり、制服が上がっているせいでキンジは“爆弾”を見てしまったのだ。

（だ・・・大丈夫、このサイズならセーフだ。）

これは不幸中の幸いだっただかもしれない

もしこの胸がもっと大きくて顔に押しつけられたりしていたら有無を言わずあの・・・

「・・・へ・・・ヘンタイ!!」

「・・・あ」

起きてしまった・・・

「さ・・・ささ・・・っサイテーっ!!」

「ってッ」

アリアはキンジをひたすら殴り続けている。

アリアはさっきの出来事は事故ではなくキンジの仕業だと思っているらしい。

「このチカン! 恩知らず!!! 人でなし!!!」

「ち・・・違う! これは俺がやったんじゃない」

ガガガガガ！

突然、体育倉庫内に大きな音が鳴り響く。

「まだいたのねっ!？」

「『いた』って何がだ!」

「『武偵殺し』のオモチャよ!」

(“武偵殺し”じゃあさっきの銃撃は)

「あんたも戦って!向こうは7台いるわ。これじゃあ火力負けする。」

「な・・・」

(ムリだ。 “今の俺”では何もできない)

ガアンッ！

アリアは跳び箱にある隙間から狙って撃っている。

狙って撃っているのだから当然前のめりになる。キンジの顔がアリアの胸にうずくまっている・・・

“アウト”だ。タブーを破ってしまった

(ああ・・・この感覚、なってしまう。なつてゆく。“あのモード”に)

「やったか」

「射程圏外に追い払っただけよ。ヤツら並木の向こうに隠れたけど・

きつとまたすぐ出てくるわ」

「強い子だ。それだけでも上出来だ。」

ああ

なつてしまった

「ご褒美にちよつとだけ

お姫様にしてあげよう」

“ヒステリアモード”に

キンジは跳び箱から出て、アリアをマットに座らせた。

「・・・な、なな、なに・・・!？」

「姫はそのお席でごゆっくり」

「あ・・・アンタどうしたの！？おかしくなっちゃったの！？」

ズガガガガンッ！

再び倉庫内に響き渡る銃声。

「あ・・・危ない、撃たれるわ！」

「アリアが撃たれるよりずっといいさ」

「さつきからなんなの。なに急にキャラ変えてんのよ！？何を
する気！？」

「アリアを

守る」

キングジはセグウェイ7台の前に立つ。

見える

照準は全て俺の頭部か

いい狙いだ

だが

当たらない！！

キンジは銃弾を全て交わし7発連射する。しかも、その7発は全てセグウェイの銃口に入る。

そのままセグウェイは壊れた。

「……す、凄い。あいつ……何者なの……」

キンジが後ろを振り向くと、アリアは跳び箱の中に入っていた。

「……お、恩になんか着ないわよ。あんなオモチャぐらいあたし一人でも何とかできた」

アリアは爆風で壊れたと思われるスカートを直そうとしながら話す。

「そ……それに今のでさっきの件をやむやにしようたってそうはしないから！」

あれは強制猥褻！レッキとした犯罪よ！！」

「……アリア。あれは不可抗力ってやつだよ」

キンジは自分のベルトを取り、アリアに渡した

「あ……あれが不可抗力ですって！？」

ベルトをつけたアリアはキンジの下へ行き、怒鳴った。

「あ・・・あたしが気絶してるスキに」

キンジとアリアが色々やっているところを平川信は見ていた。

「『HSS』（ヒステリア・サウ^ッアン・シンドローム）・・・」

そんなことを言っているとキンジが倉庫内から投げ飛ばされてきた。
その後にアリアが出てくる。

（ヒステリアモードのキンジと強襲科Sランク武偵アリア。どっちが上か見ものだな。）

拳銃の後は刀か。

「強猥男は神妙に

わおきやつ!？」

キンジの撒いた銃弾に足を滑らせるアリア。

そして、もう一度。

「11・・・11のシ・・・」

みやおきやつ!!」

アリアは常人離れた戦闘力を持っている

だが今は怒りと羞恥心でれいせいさを欠いている。対する俺は“ヒステリアモード”

たとえ100人のFBI捜査官からだって逃げ切れる。

「この卑怯者!逃げるな!

でっかい風穴あけてやるんだからあ!!」

これが俺遠山キンジと後に『緋弾のアリア』として世界中の犯罪者を震え上がらせる鬼武偵、神崎・H・アリアとの硝煙の二オイにまみれた最低最悪の出会いだった。

さて、始業式はすっぱかしちゃったし教室行かないとな。

俺がそんなことを考えてると横から刀が伸びてきた。

「・・・信」

「『HSS』のお前に俺がどこまで通用するか試してみたかった。」

「何で知ってるかは知らないけど今からやるか？」

「いや、そろそろ“通常モード”に戻っちまうだろ？今までのお前を見てきたら長くても数十分しか保ってない」

「良く知ってるな。『武偵は自分で情報を集めて推理する』ってか」

「ああ。だが、また今度の時にしておくよ。」

「ちなみに同じクラスだった。よろしくな」

それだけ言っと、信は校舎に向かって歩き出した。

第3弾

2 - A にて

「いよう。喜べ、キンジ！今年も車輜科の武藤剛気さまが一緒のクラスだぜ・・・」

キンジは完全に沈んでいた。

「星伽さんと別の」

「・・・武藤、今のそいつに女の話題を振るな」

信が窓際の一番後ろというベストの席から来た。

「平川君。おはよう。」

武藤の後ろから一人の少年が現れた。

「ああ、不知火。おはよう。」

「とにかく今、女の話題を出したらいけないってことだ。」

そう言うところとちょうど先生が入ってきた。

「はい、皆さん。席についてくださーい。2年生最初のHRをはじめますよー」

まずは去年の3学期に転入してきたカーワイイ子から自己紹介してもらいまーす。」

キンジ、信にとっては見覚えがある顔が立ち上がった。

「強襲科の神崎・H・アリアちゃんです」

驚きのあまりキンジが椅子から落ちた。

「どうしたの？遠山君。」

「・・・い、いえ。別に」

「先生、あたしはあいつの隣の席に座りたい」

この発言を聞いたクラスメイトほとんどが一齐にキンジの方を見た。

「キンジ、良かったな。何かお前にも春が来たみたいだぞ！

先生！俺、転校生さんと席変わります。」

「武藤君、ありがとう。じゃあ、神崎さんはその席に座ってねー」

拍手やなんやらいろいろ聞こえてくる。

「キンジ、これさっきのベルト」

キンジがベルトを受け取ると隣の席の『峰理子』が立ち上がった。

「分かった!!」

理子、分かつちゃった!これフラグばつきばきに立ってるよ!!」

・・・コイツは探偵科ナンバーワンのバカ女だ

「キーくん、ベルトしてない!そしてそのベルトをツインテールさんが持ってた!

これ謎でしょ、謎でしょ!？」

ロクな推理の予感がしない

「でも理子には推理できちゃった!

キーくんは彼女の前でベルトを取るような“何らかの行為”をした!そして彼女の部屋にベルトを忘れていった!

つまり二人は

熱い熱い恋愛の真っ最中なんだよ!!」

わーわーわー

今、教室はコンサート会場のように大盛り上がり中。

あちこちでほめ言葉だったり非難の声だったり聞こえる。

「お・・・お前らなあ・・・」

ズギュンッ！

アリアは拳銃を握り教室内で発砲した。

その発砲で教室は一気に静まり、一番盛り上がっていた理子は変な動きをして席に着いた。

「れ・・・恋愛だなんてくだらない！！全員覚えておきなさい！
そういうバカなことを言うヤツには・・・」

風穴、あけるわよ！！」

時間も経ち、放課後

「では今日の授業はここまでです。皆さん、くれぐれも不用意な行動及び発砲は控えるよう・・・」

先生が話している途中だったがほとんどの男子生徒の目がキンジに

向けられた

「キンジ待てッ」

キンジは上手くベルトとワイヤーを使ってベランダから飛び降り逃走した。

「くそっ逃げられたッ」

「しゃーねえ奴だなあ。ねえ、神崎さん。あいつ異性の話になるといつもああで・・・あれ？」

武藤が話しかけた時にはアリアはすでに居なかった。

そのアリアはというと

信のことを尾行していた。

信は第二グラウンドへ来ていた。

「・・・おい、いい加減姿を現したらどうだ。」

「流石ね。その様子だとあたしに気付いてグラウンドに来たみたいね」

「まあな。で、何のようだ？」

「あんたに聞きたいことがあるのよ。」

信は全く見当がつかず、頭に『？』を浮かべたがそのまま聞き返した。

「キンジのチャリジャックの時よ。あんたは直ぐにセグウェイを壊した。何でその時、キンジを助けなかったのよ。」

「それを見てたってことは知ってるだろ？俺はあの後、セグウェイに囲まれた。無理があるだろ？」

「でも、あんたの実力だったらできたんじゃない？全部は無理でも何台かは。」

ちっ、なかなか鋭いな。流石は“あの人”の末裔だけはあるな・・・

「でも、俺はBランクだし弱いから10台も倒せねえよ。」

「じゃあ、何で今ここに居るのよ。」

かなり鋭い。まずい答えを言ってしまった・・・

「本当に弱いかどうか見せて貰おうかしら。」

アリアは俺に向けていきなり発砲してきた。

俺はとっさに交わす。

「アブねえな。何すんだ。」

「あんたが弱いつて言うから確かめたのよ。」

『確かめたのよ』って初めから狙ってるだろ。今、頭すれすれだつたぞ。

・・・仕方ない

俺は刀を抜く。

それに合わせてアリアも刀を抜く（二刀流）。

「いざ、真剣に勝負！」

「信、あんたの本気見せなさい！」

俺たちは刀どうしでぶつかり合う。俺の場合は主要武器が刀なので有利かと思うが対するアリアは二刀流なので実力はほぼ互角。

（くっ、流石はSランク武偵。一筋縄では行きそうにない・・・）

（ここまで刀を使いこなす奴なんて初めて見たわ・・・）

（（コイツやれる！！）（）

二人は一度離れ、距離をとる

アリアは再び襲いかかってくる。

信は刀を大きく構える。そして、大きく一振りする。

「『鎌鼬』発動！」

「きゃあ！」

アリアは吹き飛ばされたが尚も立ち上がる。

（今ので仕留められなかったのは痛いな・・・）

『鎌鼬』には弱点がある。鎌鼬を作る時には溜が必要になるのでその溜の時間に攻撃されると終わりだ

（アリアが気付いているかどうかだな・・・）

信は再び構え直す。

「『鎌鼬』発」

「そこ！」

アリアは発砲してくる。とっさに避けるが避けきれず弾が一発当たった。

「くっ・・・」

（やっぱり、気付いていたか・・・）

俺は刀をしまい両手を挙げる。

「何のマネよ！」

「・・・降参」

「何勝手に止めてるのよ！」

「武偵同士だ。流石に血は流したくはない。」

「・・・まあ、いいわ。これであんたの実力ははっきりしたわ。でも、まだ何か隠してるんじゃないの？」

「・・・別に」

「・・・あんた、キンジの部屋知ってる？」

「ついてくるか？教えてやるよ」

二人はキンジのいる第三男子寮を目指す。

第4弾（前書き）

ようやく更新です。

この小説を見てくださっている皆様お待たせしました。

第4弾

第三男子寮へと戻って来たキンジは今朝のチャリジャックのことを思い出していた。

あれは本当に何だったんだろう。イタズラにしては悪質すぎる。あの『武偵殺し』の模倣犯は爆弾魔だ

爆弾魔は無差別に爆発を起こし人々の注目を集めてから世間に自分の要求をぶつけるのが一般的である

となるとあれはたまたま運悪く俺のチャリに仕掛けられたものなのだろうか

それとも俺個人を狙ったものか、だが何の恨みで？

ピンポンピンポンピポピポピポピポピポピンポーン

チャイムがしつこく鳴り響く

「あーもう、うっせえな！放課後ぐらい静かに」

「遅いっ！！あたしがチャイムを押したら五秒以内に出ること！！」

「か・・・神崎！？と信！？」

「アリアでいいわよ」

アリアはキンジの断りもなく部屋に勝手に入っていく。

「待て、勝手に入るなっ！」

「邪魔する」

「お前もだ！信」

アリアのトランクを持って信は奥に入っていく

「あんた達に話があるのよ」

「え？」

「キンジ！信！あんたたちあたしのドレイになりなさい！」

ありえん。ありえんだろ、コイツ

いきなり家に押しかけてドレイになれだ？

「・・・それは無理だ。俺は『灰色の武偵』。使命を果たすまではパーティーは組まない」

「灰色の武偵？何ソレ？よく分かんないけどあんたもここにいて

それよりも、キンジ！さっさと飲み物ぐらい出しなさいよ！

コーヒー！エスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！砂糖はカンナ！一分

以内!」

(・・・なんだ。その呪文)

もちろん、そんなものは無くアリアと信に出されたのはインスタントである

「これコーヒー?」

「それしかないだから有り難く飲めよ」

「・・・ヘンな味、ギリシャコーヒーにちょっと似てる・・・。んーでも違う・・・」

「味なんかどうでもいいだろ。それよりだ

今朝助けてくれたことには感謝してる。それに、その・・・お前を怒らすような事を言ってしまったことは謝る

でも、だからってなんでここに押しかけてくる?」

「分かんないの?」

「分かるかよ」

「あんたならとづくに分かってると思ったのに

まあいいわ。そのうち、思い当たるでしょ」

アリアが寝るような姿勢になり一瞬ドキッとするキンジ

「おなかすいた。なんか食べ物ないの？」

「ねーよ。」

「ないわけないでしょ。あんた普段なに食べてんのよ」

「食い物はいつも下のコンビニで買ってる」

「ああ、あの小さなスーパーのことね。じゃあ、行きましょ」

「じゃあってなんだよ」

「バカね、食べ物を買に行くのよ。もう夕食の時間でしょ？」

（会話がかみ合っていない・・・）

アリアはソファから飛び降りてキンジに顔を近付けた

「ねえ、そこって松本屋の『ももまん』売ってる？あたし、食べた
いな」

武偵が気をつけなければいけないものがある。“闇”“毒”“女”

アリアは黙々と食べる。今、五個目である

ももまんとは一昔前にブームになった桃っぱい形をしたただのあんなんだ。

「・・・ていうかな、ドレイってなんだよ。どいう意味だ」

「強襲科であたしのパーティーに入りなさい。そこで一緒に武偵活動をするの」

「俺は強襲科がイヤで一番マトモな探偵科に転科したんだぞ。それなのに、あんなトチ狂った所に戻るなんて　ムリだ」

「あたしにはキラいな言葉が三つあるわ」

「聞けよ、人の話を」

「『ムリ』『疲れた』『面倒くさい』この三つは人間の持つ無限の可能性を自ら押し留める？　よくない言葉

あたしの前では二度と言わないこと、いいわね？

キンジのポジションは　そうねあたしと一緒に前衛がいいわ」

フロント
前衛とは武偵がパーティーを組んで布陣する際の前衛。負傷率ダントツの危険なポジションである

「よくない！　なんで俺なんだ」

「もちろん信もよ」

「話聞け！」

「さっきの話聞いて無かったのか？パーティーは組まないって。クエストは別だが・・・」

「キンジは質問ばかりの子供みたい。仮にも武偵なら自分で情報を集めて推理しなさいよね」

この時、二人はこう思った

駄目だ。こいつとは会話のキャッチボールが成り立たない

「とにかく帰ってくれ俺は一人でいたいんだ」

「分かった。邪魔したな」

信は素直に帰ろうとするとアリアが飛びついて来た

「ダメー！あんたもあたしのドレイなんだから帰ったらダメー！」

「アリア！止めるな！信、そのままアリアを連れて帰れ！」

「・・・キンジ、諦める。俺には無理だ」

と言う訳で今日は泊まらせてもらう。アリアも初めからその気みた
いだし・・・」

「は！？」

「まだ分からないか？あのトランク」

(あれ宿泊セットかよッ!!)

「とにかく」

「出てけ!」

「・・・な」

キンジが『出てけ』と言おうとしたが先にアリアが言ってきた

「なんで俺が出て行かなきゃいけないんだよ!」

「うるさい!しばらく戻ってくるな!」

「・・・出よう、キンジ」

キンジは再び下のコンビニへ行き、信は夜風に当たると言い別の場所へ行った

キンジ side

何故、俺が追い出される?

と言っかなんで俺を強襲科に戻そうとするんだ

一体何が目的なんだ?

信 side

俺は一体どっちの味方につけばいいのか

白黒はつきりしない、どっちにもつく。俺はずるい人間だ・・・

アリアに仲間になれと言われた時には驚いた。だが、あいつの気持ちを考えてアリアに手を貸す訳にはいかない

やっぱり俺は『灰色』だ・・・

((そろそろ戻ってもいいか・・・))

二人は再び寮に戻ろうとする

キンジが扉を開けて中に入る

(・・・あれ。あいつの気配がしない・・・?)

・・・よかった。よく分からないが帰ってくれたらしい

買ってきた物をテーブルに置き、手を洗いに洗面所に行く

(なんだ、風呂にいたのか・・・風呂お!?)

・・・ああ、風呂に入りたかったから俺たちを外に出したのか

ピン・・・ポーン

この慎ましいドアチャイム・・・白雪!?

ありえん、ありえんだろこの展開

ここは居留守を・・・

しかし、足を滑らせドアに体を当ててしまった

「うおっ!?!」

「キ、キンちゃん大丈夫!?!」

「だ、大丈夫」

仕方なしにキンジはドアを開ける

ドアを開けると和服姿の白雪がいた

「なんだよ。お前、そんなカッコで」

「あつ、これね。私授業で遅くなっちゃって……。キンちゃんにお夕飯をすぐ作って届けたから」
夕飯ならさつき食ったばかりだが……

「イ、イヤだったら着替えてくるよっつ。着替えないで来ちゃったんだけど……」

「いや、別にいいからッ」
頼む……。早く帰ってくれ……

「ねえ、キンちゃん。今朝出た周知メールの自転車爆破事件って……あれ、もしかしてキンちゃん？」

「ああ俺だよ」

「だ……。大丈夫！？ケガとか無かった！？てっ、手当てさせて！」

「俺は無事だからっ！！」

「は、はい……。それにしても、許せない。キンちゃんを狙うなんて……。私、ぜったい犯人を八つ裂きにしてコンクリ……。じやない、逮捕するよ！！」

「い、いいから……」

コンクリ？

「武偵高ではドンパチなんて日常茶飯事だろ。この話はこれで終了！」

「は、はい……。でも、今夜のキンちゃんヘンだよ?」

「へ、ヘン?どの辺が……」

「なんか……。いつもより冷たい気が……」

「き、気のせいだ!そんなことより用事!用事は何だよ?!?」

「これ……。タケノコごはん。お夕飯に作ったの。明日から合宿でキンちゃんのごはんしばらく作ってあげられないから……」

「お、おおつ。いつもありがとうな。よし、用事は済んだ。さあ帰ろうな?」

「……。やっぱり、キンちゃんヘンだよ?」

「ヤバイ、早くこの状況をどうにかしないと……」

「キンジ、と白雪?何してるんだ?」

「ようやく信が戻って来たがこの状況に置いてはグッドタイミングとは言えない」

「あ、平川君。ちょっと、キンちゃんに届け物したくて……」

「でも、悪いな。丁度今の時間帯にキンジのベレッタのメンテ頼まれてるんだ。用事が終わったら早く帰って頂けるとありがたい」

「キ、キンちゃん！ごめんなさい！そんな、大事なことがあったのに時間を引き延ばしたりして・・・」

「あ、ああ・・・もう大丈夫だから。じゃ、じゃあな！」

キンジは信を中に入れ、扉を閉めた。

「信・・・助かった・・・ありがとう」

「そんな大した事はしてない・・・気にするな」

キンジは直ぐ、我に帰り洗面所へ向かう

（何すんだ？）

事情を知らない信はキンジからタケノコごはんを渡されたので、取りあえずリビングへ向かう

（早くあの拳銃と刀を取り上げておかねば）

がらりっ

時すでに遅し。アリアは入浴を終え、出てきた。

「へ、ヘンタイ・・・」

「ち、ちがッ・・・！俺はこの刀と拳銃を・・・！」

運はキンジに味方しなかったのか、刀二本持ち上げると余計な物（下着）がセツトで着いてきた

アリアとキンジはしばらく固まり

「死ねッ！！」

アリアはキンジの鳩尾と顔面に強力な蹴りを入れる

神様、一つ聞きたい。俺が一体何をした

第5弾

「バカキンジ！ほら、起きるっ！」

朝、人が気持ち良く寝ていたのにこいつは・・・

いきなり、鳩尾にパンチと顔面に蹴りなんて・・・

「何すんだ、この！」

「朝ごはん出さないよ！」

「知るか！」

「お腹すくじゃない！」

「すかせ、このバカ！」

信！お前も手伝って、こいつどうにかしてくれ！」

キンジは上のベッドに視線を向ける。

しかし、信の姿はなく変わりに紙が一枚あった。

紙にはこう書いてあった

『キンジ、厄介事に巻き込まれるのは御免だから先に行く。アリアに何かされても自分一人で頑張れ。』

それから、登校時間はずらしたほうがいいぞ。一応ここは男子寮だからな

b y 信

「スキあり！」

「ぐおっ！」

今度は背中に強力な蹴りを打ち込む

背中を蹴られた拍子にキンジの手から手紙が落ちる

「何これ？」

アリアは手紙を読みながら寝室を出て行くキンジを追いかける。

「そのままの意味だ。だから、お前先に出ろ」

「やだ、逃がすもんか！キンジはあたしのドレイだ！！」

アリアは逃がすまいと必死にキンジの腕にしがみつく

「は・・・な・・・せ、この・・・！」

アリアは抵抗するキンジに対し、噛みつく

「いゝっただただだッ！」

キンジが時計を見ると7時58分に近づいていた

「い・・・いかん。バスに乗り遅れる・・・。この、疫病神め・・・

」

マズい、このままではマズい。

今、俺はワケの分からない侵略者・アリアに日常生活を壊されつつある

今の目標である『平凡な普通人』になるためにもまずは、平穏な日常をとりもどさねばならない

（・・・さて探偵科でクエストも受けてきたことだし）

武偵高では五時間目以降それぞれの科目に分かれて実習を行うことになっている

（アリアは強襲科で戦闘訓練を受けてるだろう。その隙に俺はアイツの目の届かない所で抵抗運動を）

「キンジ」

「・・・・・・なんで・・・お前がここにいるんだよ・・・」

「あんたがここにいるからよ」

キンジはショックの余り膝から崩れ落ちる

「答えになってないだろ。強襲科の授業、サボってもいいのかよ」

「あたしはもう卒業できるだけの単位を揃えてるもんね。で、あんな普段どんなクエストを受けてるのよ」

「お前には関係ないだろ。Eランク武偵にお似合いの簡単なクエストだよ。帰れっ」

「あんた、今Eランクなの？」

「そうだ」

武偵高の生徒は一定期間の訓練の後いきなり民間から有償のクエストを受けることができる

で、それらの実績と各種訓練の成績に基づいて、生徒にはA～Eの『ランク』がつけられる。その上にはさらにSという特別なランクがあり入試の時、キンジはそのSランクに格付けされていた。ヒステリアモードのおかげでだが

「・・・ていうか。俺にとっちゃランクなんてどうでもいいんだよ」

「まあ、ランク付けなんて確かにどうでもいいけど。それより今日、受けたクエストを教えなさいよ」

「お前に教える義務はない」

「風穴あけられたいの？」

「・・・今日は猫探した」

半ば脅迫されたのでキンジは答える

キンジのクエストは青梅に行き、迷子の猫を探すこと。報酬は一万円。0、1単位分のクエストである

「ついてくんな」

「いいからあなたの武偵活動を見せなさい」

「断る」

「・・・そんなにあたしがキライ？」

「大っキライだ！ついてくんな」

「もっぺん『ついてくんな』って言ったら風穴」

「・・・」

二人は電車に乗り青梅へ

「で猫探しっていうけど、あんたどういう推理で探すのよ」

「別に。猫の行きそうな所をしらみつぶしに歩くだけだ。・・・て

「いつかお前こそ何か案でも出せよ」

「ないわ。推理はニガテよ。一番の特徴が遺伝しなかったのよねえ
ていうか、お腹へった」

「さっき昼休みだったろ。メシ食わなかったのかよ」

「食べたけどへったのっ。なんか、おごって！」

（・・・いきなり足を引つ張りやがる）

所変わって、武偵高

「さあ、信君。今日こそ手伝ってくれなのだ」

「ヤダ」

信に話しかけてきた人物。それは装備科アムドの中で一番優秀な生徒『平賀文』（ひらがあや）。有名な平賀源内の子孫である。

手伝ってくれと言ったのは車輜科ロジと合同で作っているおもちゃ（改造模型）だ。

「他のヤツに手伝ってもらえ」

「他のみんなは手伝ってくれてるのだ。後は君だけなのだ」

「・・・断る。依頼されたメンテやら改造やら出来ない。」

「待つのだ」

「・・・まだ、何か？」

「どうしてもダメなら今回は力ずくで・・・」

と言った平賀の後ろには装備科アムトと車輛科ロジの生徒たちがかなりいた

（・・・お前ら仕事しろよ）結局、信は手伝わされる羽目になった。

（・・・後で木っ端みじんにしてやる）

一方、キンジとアリアのその後は

二人は無事に猫を送り届けた後、寮に戻った

夕食を済ませ、色々やって（キンジはやられて）寝た。

キンジはアリアが寝たのを確認した後携帯を開きメールをうつ

送信先は

『峰理子』

第6弾

武偵高にある植物園にて

「・・・理子。何のようだ」

「くふ。単刀直入に言うと、平信^{へいしん}には少しの間アリアの奴隷になつてもらいまゝす！」

「その呼び方止める・・・。で、何でだ？」

「簡単に言えば潜入調査かな？アリアの下について行動を探つてくださゝい！」

「無理つて言つたら？」

「“あの子”の・・・」

「・・・分かった。だから」

信の話を遮るように植物園の扉が開く。信は理子から離れ裏口から出て行つた

中に入って来た人物はキンジだった

（信か？）

「キーくうーん！」

「相変わらずの改造制服だな。なんだ、その白いフワフワは」

「これは武偵高の女子制服白ロリ風アレンジだよ！キーくん、いいかげんロリータの種類ぐらい覚えようよお」

「断る。それより、早く終わらせたい。もちろん、アリアには秘密だぞ」

「うー、らじゃ！」

キンジは鞆に手を入れ中から袋を取り出すと理子がすぐに奪い去る

「うつつわあー！『しろくろつ！』と『白詰草物語』と『妹ゴス』だー！」

袋の中にはギャルゲーが入っていた

「あ……。これとこれはいらない。理子はこっいつのキライなの」

理子はそう言い『妹ゴス2』と『妹ゴス3』をキンジに渡す

「なんでだよ。他と同じようなヤツだろ」

「ちがう！『2』とか『3』なんて別称！個々の作品に対する侮辱！」

「・・・じゃあ、その続編以外のゲームをくれてやる

そのかわりアリアについて教える」

「あい！！！」

「まずは強襲科^{アサルト}での評価を教える」

「んと、ランクはSだったね。2年でSって数えるくらいしかないないんだよ」

「・・・だろうな。」

チャリジャックの時のあの身のこなし。どう考えても常人レベルじゃない

「それから、徒手格闘も上手くってね。流派はバーリ・・・バーリツウ・・・」

「バーリ・トウッドか」

「そうそう。後ね、拳銃とナイフは天才の領域。どっちも二刀流で両利きなんだよ」

「それは知ってる」

「じゃあ、2つ名も知ってる？」

「2つ名？」

「『カトラ双剣双銃のアリア』」

よく分らないが4つ（カトロ）の武器を持つという意味の2つ名なのだろうか

「他には・・・アイツにどんな実績がある？」

「あ、それはスゴい情報があるよ。」

アリアは14歳からロンドン武偵局の武偵としてヨーロッパの各地で活動しててね。・・・その間一人も犯罪者を逃がしたことがないって

「逃がしたことがない？」

信じられない。考えただけで寒気がする

「・・・体質はどうだ」

「うーんとね、アリアってお父さんがイギリス人とのハーフなんだよ」

「て、ことはクォーターか」

「イギリスの方の家がミドルネームの『H』家」

「すつごく高名な一族らしいよ。おばあちゃんは『D^{デイム}a m e』の称号を持ってるんだって」

「じゃあ、あいつ貴族じゃねーか」

「そうだよ。で、他には？」

「いや、もういい」

キンジは自分の寮に戻った。

部屋に入るとアリアと信がいた

「遅い」

「・・・どうやって入ったんだ、お前ら」

「信に鍵を作らせたのよ」

「他人に作らせて勝ち誇った顔するな」

キンジは手鏡を持って自分の髪を整えているアリアに向かって言い放った

「さすが貴族様。身だしなみにもお気を使われていらっしゃるわけだ」

「・・・あなた、あたしのこと調べたわね？」

「ああ」

「本当に今まで一人も犯罪者を逃がしたことがないんだってな」

「いよいよ武偵らしくなってきたじゃない。・・・でも、こないだ一人逃がしたわ」

「へえ、凄いヤツもいたもんだな。誰を捕り逃がした？」

理子の情報にも間違いがあったか？

「あんたよ」

「な・・・。俺は犯罪者じゃないぞ！なんでカウントされてんだよ！」

「強猿したじゃない！あんなケダモノみたいなマネしてしらばくれるつもり！？このウジ虫！」

「だから、あれは不可抗力だっつってんだろ！」

「うるさいうるさい！とにかくあんたと信ならあたしのドレイで
きるかもしれないの！強襲科アサルトに戻ってあたしから逃げた実力をもう
一度見せなさい！」

「あ、あの時は偶然だ。俺はEランクの」

「ウソよ！あんたの入学試験の成績Sランクだった！」

そうきたか

「つまりあれは偶然じゃなかったってことよ！あたしの直感に狂い
はないわ！」

「とにかく、今はムリだ！」

「今は？」

「ってことは何か条件があるの？言ってみなさい。協力してあげるか
ら」

無理だ！俺を性的に興奮させるってことだぞ！

「教えなさい、その方法！」

なりたくない。もう、俺はあのモードになりたくないんだよ！！

「・・・キンジ。一回だけならどうだ」

ずっと黙っていた信が会話に混じってきた

「一回だけ強襲科アサルトに戻ってみればいいだろ」

「そう・・・だな。戻ってから最初に起きた事件を一件だけお前と一緒に解決してやる。それが、条件だ。」

だから転科じゃない。自由履修として強襲科アサルトの授業を取る。これでどうだ」

「・・・いいわ。この部屋から出てっであげる。あたしも時間がなし、その一件であんたの実力を見極めるわ」

「・・・どんな小さな事件でも一件だぞ」

「OKよ。そのかわりどんな大きな事件でも一件よ」

「分かった」

「ただし、手抜きしたりしたら風穴あけるわよ」

「ああ、約束する。全力でやってやるよ」

通常モードのおれの全力でな

第7弾（前書き）

『オリキャラ設定』追加しました。

是非そちらも見てください。

第7弾

戻ってきてしまった。

強襲科通称、『明日なき学科』に

「キンジ？」

「キンジだ・・・」

「キンジ！お前は絶対帰ってくると信じてたぞ！」

普通なら素晴らしい会話が始まるだろう。

だが、ここ（アサルト）は違う。

「さあ、キンジ。ここで1秒でも早く死んでくれ」

「お前こそ俺よりコンマ1秒でも早く死ね」

「キンジいーやつと死にに帰ってきてくれたか！武偵はお前みたいなマヌケから死んでいくもんだからな！」

「じゃあなんでお前が生き残ってたんだよ」

死ね死ね言うのがここの挨拶なのだ。

アリアはその様子を窓から覗いていた。

「・・・お前は行かなくていいのか？」

「いいのよ・・・。って信！？あんたいつの間にかいたのよ!？」

「お前が中を覗きはじめてから。これ、承諾書」

信はアリアに自由履修の承諾書を見せる。

「あんたも強襲科アサルトの授業取ったのね・・・。」

「不満そうだな」

「始めにパーティーを組まないと言っておいて結局パーティーを組むのが気になるだけよ」

「・・・こっちの都合だ。」

じゃ、今日は装備科アムトの授業あるから」

信が去っていくのと同時にキングが中から出てきた。

「アリア、信と何話してたんだ？」

「信も強襲科アサルトの授業取ったって」

「信が!？」

「アイツってよく分からないのよね。教務科マスタースに行っても大した情報なかった。周りに聞いてもよく分からないって」

「俺にも分からん」

それだけ言うとキンジは校門に向かって歩き出す。アリアは直ぐにキンジの隣に來ると話し始めた。

「あのさキンジ」

「なんだよ」

「ありがとね」

「勘違いするな。俺は仕方なく強襲科アサルトに戻ってきただけだ。事件を解決したら探偵科インケスタに戻る」

「分かってるよ。・・・でもさ強襲科アサルトの中を歩いているキンジ、みんなに囲まれててカッコよかったよ」

本心なのか嘘なのかは分からないがその言葉を聞いたキンジは戸惑う。

「あたしなんかここ（アサルト）では實力差がありすぎて誰も近寄ってこないからさ。・・・まあ、あたしは『アリア』だからそれでもいいんだけどさ」

「『アリア』？」

「『アリア』ってオペラの『独唱曲』って意味でもあるんだよ。あたしはこの武偵高でも一人ぼっちだった。」

「で、ここで俺をドレイにして『デュエット』にでもなるつもりか？」

「あんたも面白いこと言えるじゃない」

「どこが面白いんだろうか？」

「て言うか信忘れてない？」

「アイツはドレイっていう柄じゃないだろ」

「やっぱりキンジ、強襲科アサルトに戻ったとたんにちょっと活き活きしました。今の方が魅力的よ」

「そんなこと・・・ないっ」

やはり、さっきの言葉は本心だったらしい。再び似たような事を言われキンジは動揺する。

「俺はゲーセンに寄っていく。お前は帰れ」

「ねえ『ゲーセン』って何？」

「ゲームセンターの略だ。そんなことも知らないのか」

「わからないけどあたしも行く。今日は特別に遊んであげるわ。こ

褒美よ。」

「いらねえよ。そんなのご褒美じゃなくて罰ゲームだろ」

キンジはアリアを振り切ろうと徐々にスピードを上げて行くがアリアもついて行く。最終的には二人とも全力疾走になった。

そんな二人の様子を後ろから信は見ていた。装備科アムトの授業があるというのは嘘である。アリアの監視活動中。

（あいつらバカか？ゲーセンなんてもう大した距離ないだろ）

信は歩いて2分程で着いた。

信が着いた時には二人はUFOキャッチャーを始めていた。

「本気本気本気！！」

本気、本気と言っていてさっきから一向に取れる気配がしない。

「どけ」

アリアをどかせてキンジがUFOキャッチャーに挑む。穴に近い物に狙いを定める

「キンジ見て！二匹釣れてる！放したらタダじゃおかないわよ！」

「もう俺にどうこうできねーよ！」

そして、ぬいぐるみは二匹とも穴に落ちていった。

二人は喜んでハイタッチをする。

「「あ」」

二人は恥ずかしくなり目をそらす。

「ま、まあバカキンジにしては上出来ね！」

アリアの取り出したぬいぐるみにはレオポンと書かれていた

「かぁーわぁーいいー！」

「キンジ、一匹あげる。あんたの手柄だからご褒美よ」

様子を見ていた信は電話を掛ける。

「こちら信。神崎・H・アリア、遠山キンジ特に変わった様子なし」

「くふ、ご苦労様。それから明日、バスに乗らないようにね。じゃあね」

（明日・・・？何があるんだ？）

明日、大変な事が起きるなど（一部を除いて）誰も知らない。

第8弾（前書き）

かなり時間が空いてしまいました・・・。
楽しみにしていた方、すいませんでした。

更新再開です！

第8弾

「・・・」

俺、遠山キンジは携帯電話のアラーム音で目覚めた。

（・・・ああ。そっぴや帰ったんだっけな）

最近はずっとアリアに邪魔されていたが今日は早く準備が出来た

（まだ少し時間があるな・・・）

おかしい・・・。俺はちゃんとちよつと早めに家を出たのに

なんでもうバスが来てるんだ？

「やった、乗れたー！おうキンジおはよう！」

「のっ乗せてくれ、武藤！」

「そうしたいがムリだ！お前チャリでこいよっ」

「俺のチャリはぶっ壊れてんだよっ」

「ムリなもんはムリだ！キンジ、男は思いきりが大事だぜ？」

武藤を乗せた満員バスはキンジだけを乗せず行ってしまった。

（くそつ、徒歩かよ。）

しばらく歩いていると電話が掛かってきた。

「もしもし」

「キンジ、今どこ」

「・・・アリアか。今強襲科アサルトのそばだ」

「ちょうどいいわ。そこでC装備に武装して女子寮の屋上に来なさい」

「なんだよ。強襲科アサルトの授業は五時間目からだろ」

「授業じゃないわ。事件よ！」

事件。何だ・・・何が起きたんだ。できれば小さな事件であつ

てほしい

キンジは武装し終わると女子寮の屋上に来た。

「レキ・・・」

アリアめ転入生のくせにいい駒が分かってるな

「信もか・・・」

「もう一人くらいSランクが欲しかったところだけど他の事件で出払ってるみたい。4人パーティーで追跡するわよ」

「追跡って・・・何をだ。フリーファイナ状況説明くらいきちんとしろ」

「バスジャックよ。武偵高の通行バス、あんたのマンションの前にも7時58分に停留したハズのやつ」

（あのバスが乗っ取られたっていうのか？あれには武偵高のみんながスシ詰め状態で乗ってるんだぞ！）

「犯人は車内にいるのか」

「分からないけどたぶんいないでしょうね。バスには爆弾が仕掛けられてるわ」

爆弾・・・

「キンジ、これはあんたの自転車をやったヤツと同一犯。『武偵殺し』の仕業だわ」

「でも『武偵殺し』は逮捕されたハズだぞ」

「それは真犯人じゃないわ」

「・・・なんだって？ちよつと待てお前は何の話をしてるんだ」

おかしい。この話はあちこちおかしい

「背景の説明をしてる時間はないしあんたには知る必要もない。このパーティーのリーダーはあたしよ！」

「リーダーならリーダーらしくしっかり説明しろよ！」

「・・・余計な事は考えるな。今は事件のことだけ考える」

「でもなあ」

キンジの言葉を遮るようにヘリコプターがやって来た。

「ああやるよ！やりやいいんだろ！」

「これが約束の最初の事件よ。二人共ちゃんと本気を出しなさい」

「ああ」

「言っておくが俺にはお前が思い込んでいるような力はないんだぞ。ブランクも長い」

「問題ないわ。万一ピンチになるようだったらあたしが守ってあげるわ」

4人はヘリコプターに乗り込む。

「見えました」

しばらく乗っているとレキがバスを見つけた。

「空中からバスの屋上に移るわよ。あたしはバスの外側をチェック。キンジと信は車内で状況を確認。レキはヘリでバスを追跡しながら待機」

3人はバスの上にパラシュートで降りる。

キンジは窓を叩き窓を開けてもらい中に入る。後につき信も車内に入り込む。

「キンジ！あの子の携帯が」

武藤が指差した少女の携帯が喋り出していた。

『速度を落とすと爆発しやがります』

信はインカムからアリアに状況を報告する

「アリアか、やはりこのバスは遠隔操作されてる。そっちはどうだ」

「爆弾らしきものがあるわ！」

「カジンスキーB型のプラスチック爆弾か？」

「ええ、そうよ。見えるだけでも炸薬の容積は3500立方cmはあるわ！」

「潜り込めるか？」

（たかがバスジャックにやりすぎだろ・・・）

「今から」

突然、バスに衝撃走る。

キンジは窓から体乗り出し後方を見るとルノーの助手席にセグウェイが座っていた。

「みんな、ふせろっ！！」

キンジが叫んだのと同時にセグウェイは乱射し始め窓ガラスの破片がバス内に飛び散る。

運転席を覗くと運転手は気絶していた。

（被弾している・・・！）

『有明コロシアムの角を右折しやがれです』

「武藤！運転を代われ！減速させるな！」

キンジは武藤にヘルメットを渡す。

バスは有明コロシムまでやって来た。

「カーブするぞ！みんな左に寄れ！！」

（生徒たちを左側に集めて重心を保ったのか）

キンジがバス屋上に上がるのと同時にアリアも車外下から上がって来た。

「アリア、ヘルメットはどうした！」

「さっきルノーに追突された時にブチ割られたのよ！あんたこそどうしたの！」

「運転手が負傷して、今武藤にメットを貸して運転させてるんだ」

「危ないわ！どうして無防備に出てきたの！なんでそんな初歩的な判断もできないのよ！すぐ車内に隠れ」

アリアの目にはキンジを狙うセグウェイが映った。

「後ろっ、伏せなさいよ！何やってんのバカっ！！」

「え？」

アリアに言われキンジはようやく気づいた。

死んだ

キンジは死を覚悟した。しかし、撃たれたのはキンジではなくアリアだった。

アリアは額から血を流しその場に倒れ込む。

「アリアー！アリア」

キンジはひたすら名前を呼ぶ。

「アリアー！！」

この直後に2発の乾いた音が響く。

その音と共にルノーは退きコントロールを失い後方で壊れた。

「私は一発の銃弾」

「レキ・・・」

「銃弾は人の心を持たない。故に何も考えない。ただ、目的に向かって飛ぶだけ」

レキの放った一発の銃弾は車外下に付いていた爆弾を飛ばした。

飛ばされた爆弾は海に落ち、爆発し大きな水しぶきが上がった。

バスは次第に遅くなりやがて止まった。

「任務完了・・・」

信は携帯電話に向かって静かに話した。

第9弾（前書き）

アクセス1万超えました！！！！

第9弾

俺、遠山キンジは今、アリアの病室前にいる。

ドアの隙間から覗くとアリアは手鏡を持っていた。何を気にしているかは分かる。

俺が付けてしまった額の傷痕だ・・・。

「アリア」

そう言い俺はドアの前に戻りノックをする。

「あ、ちょ、ちょっと待ちなさいっ」

何やらもの凄い物音がしてくる。

「いいわよ」

キンジが中に入ると手に持っていたものが鏡から拳銃に変わっていた。どうやら、整備をしているらしい。

「お見舞い？ ケガ人扱いしないでよ」

「レッキとしたケガ人だろ。その額の傷・・・」

「傷が何だっというの？ なにジロジロ見てるのよ」

「いや…その、それ、痕が残るんだろ」

「だから何？別に気にしてないわよ。あんたも気にしないでいい」

アリアはそう言うのと整備していたガバメントを棚の上に置く。

「あたしは武偵憲章にしたがっただけよ」

「武偵憲章だなんて……。そんな、キレイ事をバカみたいに守るなよ」

「……あたしがバカだっていうの？キンジの分際で

でも、そうね。こんなバカを助けたあたしはバカだったのかもね」

ちよつと間を置きキンジはビニール袋を取り出す。

「……ももまん？」

「食えよ。5つ買ってきた」

アリアは少しビニール袋とにらめっこするとすぐさまキンジから袋を奪い去りももまんを食べ始める。

「ゆっくり食えよ。ももまんは逃げていかない」

「うるふあい。あたしの勝手でしょ」

「……まあ、食べながら聞け。あの後、犯人が使っていたホテルの部屋が見つかった」

「・・・宿泊記録は？」

「ない。というか、宿泊データが外部から改竄されてたんだ」
鞆から取り出した調査書をアリアに向かって投げる。

「峰理子を中心に探偵科インクスタと鑑識科レミアに部屋を調べてもらったよ
が、犯人像に繋がるような痕跡は何一つ見つからなかった」

「でしょうね。『武偵殺し』はケタ外れに狡猾なヤツよ」

この会話を覗き込む人物が一人いた。

もちろんのことながら信である。

そして、その後ろにもう一人の人影。

「・・・黙って後ろに立つなよ。・・・レキ」

「信さん、お見舞いですか」

「ああ、だけどこの空気じゃ入りづらくて。お前も見舞いか？」

「いえ。私はあなたに用があって来ました」

信は一瞬ドキッとした。レキとは余り話した事もなくせいぜい名前を知っていたぐらいだ。そんな人物から話……。おそらくバスジャックに関してだろう。

「・・・俺に何の用だ？」

「信さん、あなたは『武偵殺し』もしくは『武偵殺し』に関わっている人物ですか」

単刀直入すぎないか？

「何を根拠にそんなことを言うんだ」

「アリアさんが爆弾を見つけた時にあなたは口走ってしまった。『潜り込めるか』と。あの時、アリアさんは爆弾が車外下にあるとは言っていない」

「・・・」

「安心してください。アリアさんやキンジさんにはこの事を言いません。ですから」

レキの言葉を遮り信は話す。

「今は・・・まだ、言えない・・・」

それだけ言うと信はレキの前から足早に立ち去る。

（レキにバレちゃった・・・。言わないと言っていたが・・・。次で失敗したら『あいつ』が・・・）

次の『ハイジャック』で勝負を決める

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9179y/>

緋弾のアリア～灰色の武偵 鎌鼬～

2012年1月13日17時49分発行